子どもたちが読み手として育ち、主体的に取り組むために

――国語科における「言語活動」と「総合的な学習の時間」の関連をとおして――

吉浪徳香

一　はじめに

「言語活動の充実」「自ら学び、課題を解決していく能力の育成を重視」「読書活動の充実」など、今回の学習指導要領改訂の要点は、これまでも提唱され論議されてきたことだと感じた。子どもたちが読み手として育ち、実生活で生きて働くことばの力を身に付けるには、生徒が主体的に取り組む言語活動を設定した単元が必要である。また、この単元は、つながりをつくることが苦手な生徒たちに、ことばによる学び合いを進めさせ、認識を深めさせるものになると考える。

勤務校は、総合的な学習の時間の研究実践に取り組んでおり、生徒たちの「探究」の場が保障されている。「課題解決」と調査・研究・発表などの「言語活動」を継続している生徒たちと、それを生かした国語の単元学習ができないかと考えた。

二　「言語活動の充実」の社会的要請と必要性

学校教育法では、身に付けさせたい学力を「基礎的な知識及び技能を修得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力」と明確に示した。学習指導要領では、今回の改訂において、知識・技能の活用を図り、言語活動を充実させることが重視されている。

学習指導要領には、「基礎・基本を確実に習得させたり、「活用力」（思考力・判断力・表現力）を向上させたりするためには、国語科の指導のみならず、各教科及び総合的な学習の時間等、学校の教育活動全体を通じ、「考える力」を中核として、「聞く力」「話す力」「読む力」「書く力」などのいわゆる言語活動を充実させていくことが必要であると記された。つまり、基礎・基本を確実に定着させ、「活用力」の向上を図るためには、「言語活動の充実」は切り離せない関係にある」として、言語活動の必要性を述べている。

国語科においては、「国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育てるとともに、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てることに重点を置いて内容の改善を図る。特に、言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することや、我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する」とし、現行の領域構成は維持しつつ「基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることに資するよう、実生活の様々な場面における言語活動を具体的に内容に示す。」としている。

三　総合的な学習の時間における「言語活動」

勤務校は、昨年度までの三年間、文部科学省の「学力の把握に関する研究指定事業」の指定を受け、研究推進を進めてきた。その結果、総合的な学習の時間においては、「調査・研究」学習、「自分探しの旅」、「塩中タイム」を三つの柱とした単元計画が整った。

この中でとくに、「調査・研究」学習は、各教科等で身に付けた力を活用し自ら設定した課題を解決する学習であり、さまざまな「言語活動」が必要となる。例えば、「研究テーマと仮説を設定し、それを検証するために的確な情報を集めること」「集めた情報を、図表などを用いて説明や記録の文章にまとめること」「検証するために立場を決めて意見を述べる文章を書くこと」「調べて分かったことや考えたことなどに基づいて説明や発表をしたり、それらを聞いて意見を述べたりすること」「社会生活の中の話題について、相手を説得するために意見を述べ合うこと」などである。これらの言語活動を駆使して、生徒は、「『調査・研究』学習」を進めていくのである。指導者は設定した言語活動をとおして、様々な情報を関連付けて考え筋道立ててまとめ表現する力を育て、論理的思考力や表現力の育成に取り組んでいる。

また総合的な学習の時間や教科等で身に付けさせたい力を、九能力[1]として整理した。年間十時間の「塩中タイム」においては、自分に身に付いた力を塩中カードに記述させ塩中ノートで関連させ、身に付いた力や、教科等と総合的な学習の時間との結びつきについて自覚させている。塩中ノートは、生徒の学びの軌跡が残るポートフォリオとなっている。

このように塩町中では、総合的な学習の時間をとおして、積極的に言語活動に取り組んでいる。合わせて、探究的な総合的な学習の時間につながる教科の研究実践を行っている。

本年度は、「『思考力』『表現力』を高める学習指導の改善～総合的な学習の時間における『探究』につながる授業づくり～」と研究主題を設定し、総合的な学習の時間の「探究」につながる授業づくりについて、全教職員で研究実践を続けている。研究仮説は「授業の中で、『情報の取り出し』『解釈』『熟考・評価』[2]の問題解決的な活動で学習させ、さらに、生徒自身が学習過程や自己の状況をふりかえり、仲間とかかわりながら学習をすすめることにより、『思考力』『表現力』を高めることができるであろう。」である。

四　国語科における研究実践

四―一　説明的文章の単元　二〇一〇年六月（全九時間）

単元名　自分の理論を発表しよう

「『新しい博物学』の時代」　池内　了　（中学校第三学年）

（1）単元設定の理由

本校では、「『調査・研究』学習」の単元に代表される総合的な学習の時間と「ＰＩＳＡ型学力の育成」を目指した授業研究との関連を図りながら、研究実践を進めてきた。総合的な学習の時間の実践を重ねることにより、生徒は「思考力」や「表現力」（とくに「書くこと」）において、数値の向上が見られた。

しかし、国語科の「読むこと」の領域においては「思考力」で課題がみられた。

平成21年度三次市学力テストにおいて、中学校二学年説明的文章の内容の読み取りの正答率は66％（期待正答率72％）であった。その中でもとくに「文章の展開に即して内容をとらえる」設問の正答率が、期待正答率より10％低かった。また、平成22年度「全国学力・学習」状況調査、主として「活用」に関する問題[1]の二の問題の正答率が41％であった。この問題は、トップ記事とコラムとを比較し、書き方の特徴として適切なものを選択する問題である。出題の趣旨は、記事文における表現の仕方をとらえることである。このことから、表現の仕方をとらえることに課題があると整理した。

事前に行った説明的文章に関するアンケートでは「説明的文章の学習が好きですか」の問いに対して、肯定的回答をした生徒は35％「説明的文章の学習はよく分かる」と答えた生徒は49％にとどまっていた。この結果からも、生徒が説明的文章の学習に苦手意識をもち、意欲も十分に高まっていないことが把握できた。

そこで「言語活動」を取り入れ、生徒が意欲をもち課題解決的に説明的文章を読む単元学習、生徒どうしの関わりと振り返りの場面を作ることで、「思考力」「表現力」が向上する単元学習を設定したいと考えた。単元に組み込もうと考えた「言語活動」は次のとおりである。

【言語活動1】読み取ったことをプレゼンテーションのスライドにすること

【言語活動2】説明や評論などの文章を読み、内容や表現の仕方について自分の考えを述べること

【言語活動3】「〇〇学」という意見文を書き発表し合うこと

生徒は、一学年の時より総合的な学習の時間において「調査・研究」学習を重ねており、プレゼンテーションを使って筋道立てて発表することを経験している。学校をあげた総合的な学習の時間の取組により、国語で習得した内容を実践的に活用する経験を重ねている。そこで国語科においても「言語活動」を積極的に取り組むと期待できる。国語科の単元により豊かに「言語活動」を組み込むことで、生徒を、課題を探究することのできる主体的な読み手として育てたいと考え、単元を設定した。

(2) 学習指導の過程

生徒実態から、生徒の指導上の課題を次の三点に整理した。

・段落の内容や段落相互の関係を正確にとらえること。
・筆者の論理の展開をとらえて内容を理解すること。
・表現の仕方や筆者の述べ方の工夫に注意して読むこと。

この課題を克服するために、次のような過程で学習指導を行った。

① 説明的文章の読み方の技術を指導する。
「文章の構成」「具体部と抽象部」「強調表現」「反復表現」「接続詞」など説明的文章の読み方の技術を学習する。

② 「読み取ったことをプレゼンテーションのスライドにする」という言語活動をとおして、段落の役割や段落相互の関係をとらえさせる。また要約する力を伸ばす。【言語活動1】

③ 筆者の論理の展開の工夫（構成・展開・表現の工夫）を批評して読む指導を行う。批評して読み交流することをとおして、文章の構成や展開、表現の効果などを的確にとらえる。【言語活動2】

④ 筆者の主張を批評して読む指導を行う。筆者の主張を批評して読むことで、筆者の考え方と相対化して自分の考え方を明らかにする。【言語活動2】

⑤ 論理を再構成し、「〇〇学」という意見文を書き、発表し合うという言語活動を行う。文章の構成や展開、表現の仕方を工夫して、意見文を書く。【言語活動3】

さらに、このすべての過程を、見通しをもって学習者である生徒が学習し振り返ることができるように、ポートフォリオである自己評価カードに記録することを継続させた。

(3) 単元の実際と生徒の反応

単元のはじめに単元の自己評価カードを配り、単元を貫く言語活動として「『〇〇学』という自分の考える学問を提唱すること」を伝え、見通しをもたせた。そして、説明的文章の読み方の技術を指導し、「新しい博物学の時代」を通読して初発の感想を書いた。初発の感想は、全員のものを一覧にして読み合った。また「この文章は分かりやすいか、分かりにくいか」ということも書かせた。すると、「分かりやすい。筆者が伝えたかったことが例とよく結びついていたから。」等、筆者の述べ方を評価する記述が既に見られた。この学年は、互いを意識して意見交流が難しい学年であったが、書いたものを読み合う中で、多様な考え方を認め合い、自分の考えを書き始めた。

次に「プレゼンのスライドを作ろう」と学習目標を提示した。具体的イメージをもたせるために、総合的な学習の時間に作成したプレゼンと「エネルギー消費社会」の文章を指導者がプレゼンにしたものを例示した。総合的な学習の時間で行っている学習活動であり、生徒は抵抗無く意欲的に学習に取り組み始めた。完成すると電子黒板を使ってプレゼンを行いながら、文章全体の論理の展開を確認した。

さらに、文章を批評して付箋にその理由を書き交流した。生徒

は総合的な学習の時間においても、プレゼン発表をして意見交流をする言語活動を継続している。発表用のホワイトボードにKJ法のやり方で付箋を貼りながら意見交流をした。しかし「批評する」ということに慣れていなかったため、初発の感想で書いていた例を示して説明し、批評を引き出した。批評の視点としては、「構成」「展開」（論理の適切さ）「表現」の3つの視点を示した。良い点が多く出たが、こうすればより良くなるという改善点を挙げる生徒もいた。

生徒の意見は、次のような点である。

・主張が最初と最後の段落にあって、その間にたくさん具体例があるから読み手はなるほどと思える。（構成）
・具体例と筆者の主張とが、適切につながっている。（展開・理由と主張とのつながりの適切さ）
・⑬段落の具体例から⑭段落の主張に変わる時がいきなりすぎて、つながりが分かりにくい。接続詞が必要。（展開）
・自分の言いたいことを強調していて、伝えたいことがよく分かる。（表現）

次に、筆者の主張を批評して読む指導を行った。筆者の主張を批評して読むことで、筆者の考え方と相対化して自分の考え方を明らかにさせる。さらに、他の学習者と交流することで認識を深めさせる。生徒の記述した内容を一覧にして、意見交流を行った。

この頃になると、生徒の意見交流もより活発になり、多様な考え方に影響を受け合っていた。意見を発言する時に静かに聞き浸るようになった。生徒の意見の例を挙げる。

ぼくは、筆者の主張に賛成です。文章の中の「文科系と理科系の知を結びつけるとさまざまな学問分野に生かすことができる。」というところに賛成できました。それに、ぼくは、自分の意見と他の人の意見を結びつけたりすることで良い意見ができて、聞いている人たちにも分かりやすく説明できたり、すぐ理解してもらえたという経験があるから、「理科系と文科系の知を結びつけるとさまざまな学問分野に生かすことができる。」という筆者の主張に賛成します。

さらに、二つの批評読みと交流をとおして、自分の中に再構成されたことを「○○学」として記述した。これは学習者である生徒の認識の再構成である。クラス全員の前で発表させ、相互評価カードを記述し、発表者に返した。生徒は相手意識をもち、お互いの発表を真剣に聞き合った。発想豊かな多様な学問の発表に、クラスは盛り上がった。

「学問」については、単元前と単元後で次のような変化が見られた。（単元前→単元後）

・学問とは勉強すること→学問とは、自分のイメージを膨らませ、新たな発見をすること。
・言葉の勉強→意見を批評し合い、考え、新しい発見を見つけ出す勉強。
・学校でする勉強と同じことで、問題を解いて学ぶことだと思い

ます。→学問とは、学校で学んだこと、いろいろなところで学んだことで、新たな発見が見つかるカギとなること。
・一人ではなくて、仲間と一緒に意見を交流すること。→いろいろな教科を結びつけて、問題を解いていく。一つの教科で習ったことが、他の教科で生かせる。意見を言い合い、お互いに理解し合う。
・勉強を学ぶこと。勉学に励むこと、どんどん知識を広げていくこと。難しい問題にチャレンジしていくこと。→みんなの意見を聞き、考えを深めること。どんどん組み合わせて、学んだことを生かしていくこと。
・私は学問とは、自分にとって必要なものだと思っています。なぜなら、社会に出た時に、いろいろな場面で役立つと思っているからです。→私は学問とは、知恵や知識を生かすものだと思います。学問とは、さまざまな視点でものを見て、感じ取ったこと、発見したことを交流して学び合うものだと思います。

これらの記述から、単元の前後で「学問」「学ぶこと」についての考え方が深化・拡充していることが把握できる。学ぶとは認識が深まり「課題解決」につながるということであると、生徒たちは単元の学び合いを通してつかんでいた。

検証問題における事前と事後の数値の変化

論理の展開を捉える41％（事前）→60％（事後）

（事前は全国学力テストの結果、事後は出題の趣旨に沿って作成した検証問題を単元後に行った結果）

また、自己評価カード（ポートフォリオ）には、このような記述が見られた。

私は、この学習をとおして思考力がついたと思います。理由は、いろいろなスライドを批評しながら見て、納得することができるか、納得できないかを考えることができたからです。その他に、私は「音学」という学問について書き、それがどういう学問か、またどういう生活に良いのかを考えることができたからです。

私は、「新しい博物学の時代」を学習して、思考力がついたと思います。理由は、スライドを作るときは、長い文章をどうやって要約するか考えたからです。また自分で考えて「○○学」を考えることができたと思ったからです。そして、他の人の発表を聞いて、それ対して自分の意見を書くことができたからです。

教科担任として出会った四月、この学年の生徒は自己肯定感が低く、自信をもって自分の考えを述べることができない生徒が多いと感じた。とくにこのクラスは力を持っている生徒が多いが、集団の中で互いを意識し合い、自分の考えを表現することを控えていた。そのため、互いの意見を聞き合い、考えを深め合うということは難しかった。そこで初発の感想など、生徒に書かせた記述を一覧にして読み合うことを、単元の中で繰り返し行った。その中で生徒は、多様な考え方があることを知り、それに影響を受けながら自己の認識を深めていった。聞き合う生徒の表情も柔らかくなっていった。

また、文章を読んで「プレゼンのスライドを作成する言語活動」や「批評読みとその交流をする言語活動」を行う中で、生徒どうしの関わりが生まれ、これまでなかなか意見を出せなかった生徒の意見を引き出すことができた。

さらに、「批評読みとその交流をする言語活動」をすることで、文章を読むことは「筆者の主張やその述べ方について読み取り、筆者と対話することである」ということを、生徒は感じ取っていた。このような生徒の姿を見て、「言語活動」をとおして生徒は主体的な読み手になり、認識を深めることができると感じることができた。

(4) 今年度の取組　二〇一一年六月（全七時間）

今年度も、六月に三年生においてこの単元学習を行った。検証問題における事前と事後の数値の変化は次のとおりである。

	事前	事後
書き手の論理の展開の理解	32	78
書き手の論理の展開の理解	37	90
要旨の把握	44	76

（%）

生徒は塩中カード（ポートフォリオ）に、次のように記述した

・私は論説文が苦手で、文章を見るだけでため息だったけど、文章の着目点をおさえるだけで、だんだん分かってきて、付せん紙に批評がたくさん書けました。難しい言葉も意味調べをして理解できたので、これからも活用していきたいと思います。私は、思考力がついたと思います。

・「新しい博物学の時代」を読んでみて、私は今まで論説文が苦手だったけど、できるようになったと思います。理由は批評をすることで、理由と主張のつながりの適切さや構成について読み取ることができたからです。批評がとても楽しかったです。

・題名読みをしたり批評をしたりして、たくさん考えたので思考力がついたと思う。批評では、自分の考えを交流し合って、より考えを深めることができた。理由や資料、表現について批評することができた。

・私は、思考力が身に付いたと思います。理由は、批評するためには、しっかりと文章を読んで考えたりしなければいけないと思ったからです。また意味調べをして、今まで知らなかった言葉が知れてよかったです。

(5) 分析と検証

「プレゼンのスライドを完成させよう」と目標を提示すると、総合的な学習の時間で経験している学習活動であり、生徒は抵抗無く、意欲的に取り組んだ。その後、文章を批評して付箋にその理由を書き交流した。ここでも活発な意見交流をすることができた。これも、総合的な学習の時間において発表と意見交流をする言語活動と重ねて、取り組むことができた。文章を読むことは、「筆者の主張やその述べ方について読み取り、筆者と対話することである」と

いうことを、言語活動として取り組むことで生徒は自然につかんでいた。このような生徒の姿を見て、「言語活動」をとおして生徒は主体的な読み手になることができると確かに感じている。

今回は生徒実態を考えて、筆者の論理の展開の工夫（構成・展開・表現の工夫）を批評して読む段階と筆者の主張を批評して読む段階を設けた。しかし生徒が、「批評して読む」という言語活動に慣れてくると「意味理解」「論理過程の理解」「ものの見方や考え方を批評する読み」を相互に関連させながら同時に行うことができると思う。「書き手の論理の展開の理解」の数値も単元後は上がっており、批評する読みは論理の展開を読み取ることを導くものであることが、本実践をとおしても検証できた。「批評して読み、交流すること」という言語活動は、学習者である生徒に読みの必然を感じさせ、主体的な読み手として育てると同時に、認識を深め再構成させるということをつかむことができた。

四―二　文学的文章の単元　二〇一〇年九月（全十一時間）

単元名　読書会を開こう！～「いのち」「生きる」～

（中学校　第一学年）

「蠍座カレンダー」　薄井ゆうじ

「空中ブランコ乗りのキキ」　別役　実

(1) 単元設定の理由

これまで学校の文学教材の授業では、「教材で学んだことを生かして他の作品を自力で読み取ることができにくいこと」や「日常の読書を進んですることができにくいこと」などの課題があった。これらの課題は、指導者が国語科の中で生徒に読書に生かすことのできる「文章の読み方」を明確にして指導することが十分にできていなかったことによるものである。また、教師が期待する読みに収束させたり、生徒の自由な読みを出し合うだけで終わったりすることが多いという課題があった。そこで、様々な文学作品を読むために必要な「文章の読み方」を指導することが必要だと考えた。

しかし、文学作品の場合、これだけでは十分ではない。山元隆春は、文学教材を読む目的を「世界認識の方法や現実世界を生きるためのモデルを求めて読むことである。」と述べ、難波博孝は「文学作品はそのような子どもたちの「価値観の転換の可能性」を体験させてくれるツールでもあるのです。」と述べている。私も同じように、文学作品で育てることのできる力、文学作品だからこそ育てなければならない力があると思う。「作品の人物の考え方や生き方から自分の内面を見つめ、自分の生き方を考える力」も育てていきたいと考える。このような力を育てることも大切にしていかなければ、文学作品を読み味わったり読み深めたりすることはできないだろう。

そこで「読書会を開こう！～「いのち」「生きる」～」という単元を設定した。その中で設定した言語活動は、「物語や小説などを読んで批評すること」「課題に沿って本を読み、必要に応じて引用して紹介すること」である。なお、一枚ポートフォリオの形式をとった自己評価カードを用いることにより、単元の前後において自己の認識の深化・拡充を自覚させることをめざした。

(2) 学習指導の過程

これらの指導上の課題を克服するために、次のような過程で学習指導を行った。

① 一枚ポートフォリオに単元のはじめの自分の考えを書き、自分の考え方を明らかにする。

② 「いのち」「生きる」をテーマにした本を読んで、読書会を開くという単元のゴールを伝え、学習の見通しをもたせる。

③ 文学作品の「読みの観点」を指導する。初発の感想を交流する中で、「読みの観点」が生かされていることを確認させる。

④ 「蠍座カレンダー」を読む。

⑤ 「空中ブランコ乗りのキキ」を読む。

⑥ 「いのち」「生きる」をテーマにした本を選び、本を紹介する原稿を書く。自分の選んだ本について、作者の考え方や中心人物の生き方について批評し、自分の考えを書く。【言語活動1】

⑦ 読書会を開く。自分の選んだ本について、作者の考え方や中心人物の生き方について、自分の考えを発表し合う。【言語活動2】

⑧ 一枚ポートフォリオの最後に単元の最後の自分の考えを書き、自分の考え方を明らかにする。単元のはじめの自分の考え方と比較する。

(3) 検証と考察

三次市学力テストから（二〇一一年一月実施）

この学年の文学作品を「読むこと」の正答率は次のようであった。

	学年平均	期待正答率
心情の把握	97	85
心情の把握	85	80
主題を読み取る	85	70

（%）

Aくんは小学校三年生の時、中国から日本に来た生徒である。言語事項を習得しきれない部分があり、国語全体の正答率は50%であった。しかし「文学作品の読み取り」の正答率は100%であった。

《個に焦点を当てて》

Aくん

ぼくは、この授業を通して、生きる大切さとすばらしさがよく分かりました。今までは、テレビで死にそうな人をみても「かわいそうだな」としか思っていなかったけど、この授業で説明しづらいけど、また命について、大切でいいものだと思った。

Bさん

生きるというのは、自分のためだけじゃない、自分の命は自分だけのものじゃないと感じた。生きることも自分の命も、人に支えられているから、人を傷つけて生きていくのは間違っていると思った。生きていくには、大きな選択を迫られるときもあるけど、大きな壁も自分なりに努力して乗り越えていこうと思った。

Cさん
いろんな作品から、多くの生き方があること、多くの考えや選択があることが分かった。本を読み、紹介されるまでは知らなかった生き方を、自分の生き方に生かしたり、何かを考えるときに思い出したりできるようにしたい。もっと本を読みたい。

これらの記述から、単元目標である「作品に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広くすること」が達成されたととらえる。とくにCの生徒の記述は、文学作品を読む意味・読書の価値を的確にとらえている。また、読書への意欲も高めている。作品中の人物の生き方と比べ「自分だったら」と考え自己内対話をしたことは、相対化して自己の考え方を明らかにさせ、考え方を揺さぶったと考える。Bの生徒は、振り返りに「初めは私も、命をかけるくらいブランコに思いがあるのだからキキに賛成だったけど、白い鳥がキキだと考えると、やっぱり反対だなと思った。」と記述している。また単元の前後で記述が次のように変化している。

《単元のはじめ》
一つ（一回）しかなく、とても大切なもの。傷つきやすい反面、支えがあればのりこえられる。一人では生きていけない。
《単元のおわり》
「命」・「生きる」というのは、人によって感じ方が異なると思いました。でも、全てに共通するのは、命というものは尊いものであり、人の数だけ生き方があるということです。生きるということは必死で生きて「良かった」と思えて命を終わらせるのが、人の生だと感じました。

単元の最後に、ポートフォリオを使って対話をして、Bさんはその時間の振り返りに「単元のまとめを書いて、はじめの考えと通じるものがあったけど、まとめのほうが深く書けた。」と記述している。これは、自己の認識の深まりを自覚した記述である。他には「テーマについて、最初の考えより最後のほうが具体的になっていた。これから前向きに生きることをしていきたいです。」と記述している生徒もいた。

この単元においても、「物語や小説などを読んで批評すること」「課題に沿って本を読み、必要に応じて引用して紹介すること」という言語活動を取り入れたことが、生徒どうしの関わりを生み、認識を深めることに非常に有効であったということができる。

五　おわりに

「言語活動」は、学習者である生徒に読みの必然を感じさせ、主体的な読み手として育てると同時に、生徒どうしの関わりを生み出し、認識を深めることに非常に有効であるということを検証することができた。

今後は、生徒の学習活動をより精緻にとらえて分析・考察すること、例えば、どのような生徒どうしの関わりが生まれたが記録し、

考察することが必要であると考える。そして、ポートフォリオとなる自己評価カードを工夫し、生徒に単元のはじめの自分の考え方と比較させたい。そして交流することにより、自己の認識の深化・拡充の自覚をより丁寧に行いたいと考えている。また、もう一度文章にもどって読むという段階も取り入れたい。

「言語活動」の必要性・有効性は、国語教育学会の中では以前より述べられていた。それが学習指導要領にやっと反映されたと感じる。今回の改訂で学習指導要領を根拠として単元学習を組みやすくなった。

また、総合的な学習の時間で目標とされてきた主体的な「課題解決力」が、各教科でも必要であると明示された。各教科等と総合的な学習の時間との関連を意識し、各教科等で付けられた力が総合的な学習の時間で生きて働くよう、また総合的な学習の時間に探究的な学習指導を組むことで、教科等での課題解決力が伸びるよう、両者の関連をより強くすることが必要であると考えている。それをつなぐキーワードが「言語活動の充実」であると考える。

「言語活動」は、生徒の関わりを生み出し、認識の深化・拡充につながる。また、学習者を主体的な読み手として育てるということを実感している。これからも、その力を育んでいく単元学習を、総合的な学習の時間と関連させながら国語科の中で創造していきたい。また、「言語活動」をキーワードとして、他の教職員と連携し、各教科の中でも学ぶ力につながることばの力を育んでいきたいと考える。

（広島県三次市立塩町中学校）

参考引用文献

難波博孝『楽しく論理力が育つ国語科授業づくり』（明治図書、二〇〇七）

難波博孝『文学体験と対話による国語科授業づくり』（明治図書、二〇〇七）

河野順子『〈対話〉による説明的文章の学習指導』（風間書房、二〇〇六）

宮本浩子・西岡加名恵・世羅博昭『総合と教科の確かな学力を育むポートフォリオ評価法』（日本標準、二〇〇四）

糸井通浩・植山俊宏編『国語教育を学ぶ人のために』（世界思想社、一九九五）

難波博孝『臨床国語教育を学ぶ人のために』（世界思想社、二〇〇七）

鶴田清司『国語の基礎学力を育てる』（明治図書、二〇〇三）

森田信義・山元隆春・山元悦子・千々岩弘一『新・国語教育学の基礎』（溪水社、二〇〇七）

宮本浩治「子どもたちが読み手となるとき―書くことによって読む力を高める実践の模索―」第47回広島大学国語教育学会研究発表資料（二〇〇六）

細　恵子「ポートフォリオ評価を取り入れた文学作品の指導に関する研究―ルーブリックとポートフォリオ対話に焦点をあてて―」（二〇〇九）

1　本校で育てたい9能力「情報活用能力」「発見力」「思考力」

「判断力」「表現力」「健康・体力」「将来設計能力」「人間関係形成能力」「生活力」に整理した。（平成23年度　塩町中学校研究紀要）

2　塩町中学校におけるＰＩＳＡ型学力：生徒の思考過程を次のように整理している。「情報の取り出し」…学習の目標に気づき、学習の必然性を持つ。「解釈」…解決の方法や見通しを持ちながら、課題解決を実行する。「熟考・評価」…目標・見通し・結果との関係で、自己の学習の達成状況を振り返る。